
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 85

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1681. 「Aのものだった」
- 1682. 欧州の土地に息づくもの
- 1683. 文化的堆積
- 1684. 「評価研究の理論と手法」という実り多きコースについて
- 1685. 秋も終わりに差し掛かったある夜の思念
- 1686. 無妥協
- 1687. 呼び声に従って
- 1688. 質的成長と量的成長について
- 1689. 一連の不思議な夢
- 1690. 夢の続き
- 1691. 学びに伴う身体感覚
- 1692. 成人の音楽教育に関する学際的研究に向けて
- 1693. 企業社会と自分
- 1694. 亀とキツネ
- 1695. 召喚と派遣
- 1696. バッハの「平均律クラヴィーア曲集」に範を求めて
- 1697. 孤独の園の淵にある孤独
- 1698. 整備された庭園と不可能なバランス
- 1699. 意味に宿る治癒と変容
- 1700. 芋の秘密

1681.「Aのものだった」

不思議な夢からの目覚めと共に、また新しい週が始まった。昨夜の夢は、夢の中の意識が別の個人の夢とつながっていることを直接的に示唆するものだった。つまり、無意識のある層において、自分と他者の意識は繋がっているということを明確に示す内容だった。

夢の中で私は、中学時代のある友人が運転するバイクに付いていく形で、道路を走っていた。私は何も運転する必要がなく、友人のバイクの後ろに取り付けられたモーターサーフィンのような板に乗り、その上に乗りながら道路を走っていた。友人のバイクとの距離は10mぐらいあり、バイクの後方から伸びている紐にグリップが取り付けられており、私はそれを握りながら彼のバイクに先導される形だった。

しばらくすると、友人が左折の表示を出し、鹿児島方面に向かう高速道路に乗ろうとしていることがわかった。そこでどういうわけか、彼のバイクと私が乗るモーターサーフィンのような板との関係が途切れてしまい、私は友人とはぐれた。高速道路に乗るための道は傾斜になっており、私はその道を歩いていた。

視線を左にやると、緑の生い茂った小さな公園が見えた。だが、その公園はフェンスに囲まれており、簡単に中には入れないようになっていた。高速道路に乗るのではなく、公園の横に見えた道を歩いてみよう、と私は思った。高速道路に続く道を途中で左折し、公園の脇にある道をしばらく歩いていると、先ほどはぐれた友人が後ろから息を切らせながら声をかけてきた。

どうやら彼は私を探していたらしかった。その瞬間、私たち二人がいた公園横の風景が一変し、二人は学校のロッカールームにいた。そこでその友人は、何やら彼が見た昨夜の奇妙な夢について話し始めた。

友人:「実は昨日奇妙な夢を見たんだ。その夢の中でもこのロッカールームが舞台になっていて、なぜだか、自分のロッカーの中に、誰のものともわからない下着が入ってたんだ。で、実はそれが誰のものだったかという、・・・」

私:「Aのものだった！という話でしょ。その夢、自分も昨夜見たよ！」

私たち二人はその場で目を丸くさせながら、お互いが同じ夢を見ていたことに驚いた。実はその場面だけではなく、その後の展開についても事細かく同じ夢を見ていたことに気づいた。その事実気づいたとき、私たち二人は驚きと興奮に混じった形で、次々とお互いの夢の展開について話をしていた。話しても話しても、ことごとく同一の内容が続き、私たちは大きく興奮をしており、そのようなこともあるのだ、と絶えず驚きを隠すことができなかった。

しかし、あるところから、お互いの夢があまりにも合致していることに対して、言葉には出さなかったが、お互いに不気味に思い始めていることが双方の間で暗黙的に理解された。

この夢はその後にまだ続きがある。だが、それを書くことはためられる。それは自分の無意識の層の深いところに落ちている大きな影を示唆しているからだ。ひよっとすると、その夢の続きも、どこかの誰かが全く同じものを昨夜見ているのかもしれない。だが、その夢は極めて私個人の深層に根ざしたものであるため、その夢がどこかの誰かと共有されていたとは考えにくい。

無意識の中には、他者に共有される層と共有されえない層があるのかもしれない。2017/10/23(月)
06:50

No.326: Back's Well-Tempered Clavier

After I composed music last night, I took a look at Back's music scores. I realized that his Well-Tempered Clavier would be a key exemplar for my music composition because it contains a collection of two series of Preludes and Fugues in all 24 major and minor keys. The comprehensiveness of all keys looked valuable for me.

I am convinced that I can solidify my music composition skills by imitating the series of Preludes and Fugues that encapsulate an enormous amount of Back's insights and inspiration. After I finish emulating one piece of Grieg's works that I am currently working on, I will start to follow Bach's works.

What kind of music can I compose and what can I see in music after I complete the first cycle of the imitation? Night, Thursday, 10/26/2017

1682. 欧州の土地に息づくもの

昨日は一日中、音楽の虜になるような日だった。早朝から正午までは、何人かの作曲家の生涯や作品について調べることだけを行っていた。昨日は、特にショパンに大きな感銘を受け、彼の作品をこれから真剣に聴いてみようと思い立った。同時に、ショパンが創出した曲に範を求めたいという思いが湧き上がり、結局、724ページに及ぶ楽譜を購入した。

自分の研究テーマとその方法について考えてみた時に、来年私は学術研究上の理由から、再度米国に戻ろうと思っている。そこでの生活期間は長いものになるであろう、という予感については、これまで何度も書き留めていたように思う。私の中では、その場所に行くまでに随分と長い時間を要し、それでいて、そうした長大な時間の積み重ねがなければ、私はそこに辿り着くことができなかったのだと思う。

もちろん米国においても—あるいは、世界のどこにおいても—、クラシック音楽に親しむことは可能であるが、欧州の土地で生活をしてみて痛切に感じているのは、やはりこの土地に深く根ざされたクラシック音楽の伝統は、他の土地と比較にならないものを持っているということだ。

昨日、何気なくワルシャワのショパン博物館に足を運ぼうと思ったが、欧州の土地で音楽生活を営んだ数多くの作曲家の跡地を訪れることができるというのは、非常に贅沢なことだと思う。昨年の夏は、ライプツィヒでバッハ、シューマン、メンデルスゾーンの博物館を訪れた。今年の春は、ウィーンでベートーヴェンとシューマンの博物館を訪れ、ザルツブルグでモーツァルトの博物館を訪れた。また、今年の夏は、ノルウェーのベルゲンでエドヴァルド・グリーグの博物館を訪れることができた。そのようなことを思い出していると、昨年から今年にかけて、随分と多くの作曲家の博物館を訪れたのだと知る。

「体験に勝るものはない」と言われるように、実際に、そうした作曲家が活動した土地に足を運び、同じ空気を吸うことは深い体験となり、それが彼らの生涯と曲に対する理解をより豊かなものにしてくれると強く実感している。音楽のみならず、絵画においても同様のことが言えるだろう。そうしたことを考えると、自分が関心を持つ芸術領域に関して言えば、欧州の土地以上に望ましい生活環境はない。だがそれでも私は、来年から米国に再び戻ることになるだろう。それは私の思いというよりも、私を超えた存在からの働きかけであるように思う。

仮に来年欧州を離れることになったとしても、私は心のどこかで、いつか必ず欧州の土地に戻ってくるであろうことを知っている。米国に再び戻ってから、六年後か七年後に、再度欧州の土地で生活を始めている自分の姿が思い浮かぶ。その時には、自分は一体どのような思想を持って日々を生活しているのだろうか。どのような研究テーマに打ち込んでいるのだろうか。今の段階では皆目見当がつかない。ただ一つだけ言えることは、六年後であっても七年後であっても、音楽が私のそばから離れることはないであろう、ということだ。

欧州の土地で生活することのできた最大の幸運は、学術的な探究を深めることができたということよりも、音楽との深層的な出会いだっただのではないかと思う。

欧州の土地には、私の存在を涵養してくれる何かは今もずっと眠っている。いや、それは今もずっと欧州の土地の中で息づいていると言った方がいいかもしれない。2017/10/23(月)07:45

No.327: Learning By Self-Testing

I was reflecting on my learning practice after I read an article about the effective learning. One of the gists of the article is that passive reading is ineffective to construct robust knowledge networks. Perhaps, most of us know it in our head, but we are likely to do it when we learn something.

The article suggests self-testing as an active learning method. I suppose that it is effective if we use it by interpreting the information and connecting it with what we already know. The method would be ineffective, for instance, when we passively use it by flashcards, etc.

Although self-testing may be laborious if we are not used to it, it is one of the indispensable learning methods to actively construct our knowledge systems. 17:28, Friday, 10/27/2017

1683. 文化的堆積

欧州の土地に息づくものについて文章を書き終えた瞬間に、また別の考えが思い浮かんだ。これまで、日本、北米大陸、欧州と、三つの大陸で生活してきたが、大陸間ごとに異なる文化的堆積があることは言うまでもないことだと思う。もちろん、北米大陸の中で私が生活をした米国においても、

それなりの歴史があることは確かだ。しかし、日本や欧州に比べて、米国の歴史が浅いことはよく知られていることである。実際に、米国のいくつかの都市で生活をしていた頃のことを思い出してみると、そこに広大さを感じることはよくあったが、深さを感じたことはそれほどなかったのではないかと
思う。

もちろん、米国の自然を前にした時、そこには深さがあったように思う。だが、人がその土地で築き上げた文化に触れた時、日本や欧州の深層にある文化とは、深さの次元で随分と異なるものがあるように感じたことを思い出す。これは当時を思い出してみてもその感覚であるから、やはり私はもう一度、米国の土地で生活してみなければならぬのだと思う。旅行をするだけか、短期的な滞在であっては決してならない。

「生活」という、その土地に根を下ろす行為をして初めて、その土地の深層に息づくものを掴むことができる。もしかすると、私が来年にまた米国で生活を始めようとしているのは、米国文化の深層性を確認することに端を発しているのかもしれない。そして、米国文化の深層を理解するのに、これから六年や七年、あるいはそれ以上の歳月を要することになるのかもしれないと思う。米国で生活する年数は、その点に大きく関わっているように思える。

日本と欧州は、どちらも長い歴史を持ち、その深層性の度合いについては同等のようなものを持っているように思える。だが、とりわけ主要都市を比較してみた時に、片方はその土地で長らく培われた深層性が外側の世界に滲み出しているのに対して、もう一方はその深層性が一切滲み出していない、ということに気づく。

昨年と今年の記憶を思い出してみると、パリとコペンハーゲンの重々しいと言えるような重厚さが、まだ自分の身体に残っている。とりわけ、両都市において、その土地で長大な時間をかけて堆積されたものが外側に滲み出しているような感覚を覚えた。私は、その感覚に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えている。同時に、それらの都市で生活することは、自分にはできないと感じていたことを思い出す。パリとコペンハーゲンで感じていたのは、その土地における文化的堆積が外側に滲み出しているということのみならず、下手をするとそれらに飲み込まれ、押しつぶされてしまうような感覚であった。

今生活をしているフローニンゲンの街にも、長大な時間をかけて発酵された文化的重みが滲み出している。しかし、それはパリやコペンハーゲンのものとはまた異質なものだと感じている。

大陸ごとに、そして、国や都市ごとに、文化的堆積の重さや表出のし方が異なることは、私の関心を強く誘う。そこには、人間の発達や社会の発達を考えるための、非常に重要な示唆と契機があるように思えて仕方がない。2017/10/23(月)08:06

No.328: Embodied and Active Reading

I slept very well last night. I got up later than usual. I will continue to read the required papers and books for the coming exams. I have two exams; one is coming next week, and the other is the week after the next.

Whenever I prepare for exams, I always keep in mind the importance of active reading. Just reading through a text is not so effective that I can retain the information in my long term memory. On the other hand, active reading enables me to store the information longer. In addition, active reading not only helps me to retain my memory longer but also enables me to make the information more practical.

From the perspective of pragmatism, knowledge should be embodied and practical so that we can apply it to actual tasks in our daily life. Practicality would be crucial outcomes of learning.

Although I will read a number of texts today, I try not to forget the importance of active reading. I will read loud the texts as if I explained to myself, connecting the information with my previous knowledge. 08:20, Saturday, 10/28/2017

1684.「評価研究の理論と手法」という実り多きコースについて

今日も所々で雨が降るような一日だった。今週はこれからずっと天気が崩れるようだ。

今日は、「評価研究の理論と手法」のコースの最後のクラスに参加した。このコースは、今学期のハイライトとも呼べるコースの一つである。このコースを通じて、発達支援や学習支援の介入的手法や

プログラムの効果測定をいかに行うのかについて、理論的かつ技術的なことを非常に深く学ぶことができた。正直なところ、そうした効果測定を厳密に行うためには、それほどまでに厳格な手続きを踏まなければならないのだ、ということを感じさせられるような気づきを何度も得た。具体的には、数多くの研究デザイン(事前・事後のアセスメントと対象グループの有無の組み合わせなど)の利点や盲点について学び、その限界を克服するための工夫などについて学びを深めた。また、研究デザインごとに、四つの種類の妥当性の何を毀損する可能性があるのかなどについても学びを深めた。

そもそも、そうした数多くの研究デザインがあることをこれまでの私は知らず、発達支援プログラムの効果を測定する際には、対象グループ無しの、事前事後のアセスメントを用いた研究デザインばかりを採用していたように思う。この研究デザインの盲点について、ここでは詳しく紹介しないが、介入手法やプログラムの効果測定というのは、非常に体系立った理論と方法があるということを念頭にに入れておく必要がある。

自分が採用する研究デザインが、例えば妥当性に限ってみても、9種類の内的妥当性の何を毀損する可能性があるのか、14種類の構成概念妥当性の何を毀損する可能性があるのか、5種類の外的妥当性の何を毀損する可能性があるのか、9種類の統計的妥当性の何を毀損する可能性があるのかを少なくとも把握しておかなければならない。

今改めて列挙してみたが、合計で4種類の大きな妥当性の区分のそれぞれの特徴を理解し、それぞれの妥当性の中にある合計で37個の妥当性を毀損する項目についての理解を明確にしておかなければならない。

これまで本格的な心理統計のコースを受講したことはなかったが、少なくとも妥当性という概念は、これまでの発達研究を通じて何度も目にしたことのある重要なものだった。しかし、妥当性の細かな区分についてはそれほど明確な理解を持っておらず、さらには、合計で37個の妥当性を毀損する項目についての理解はほとんどなかったように思う。

このコースを通じて学んだ概念や理論、そして評価手法については、今後の実際の研究や実務の中で大いに生きてくるだろう。

クラス終了後、自宅に帰ってから、早速今日のクラスで取り上げられた内容について振り返っていた。講義資料を眺めながら、担当教授と同じような説明が自分でできるかどうかを確認していたのである。学習項目を文章に書くだけではなく、口頭説明を自らに対して行うことの重要性を最近特に感じている。理想的には、全ての学習項目について自分の言葉で文章を書くことであり、それ以上に学習効果の高い方法はないように思う。しかし、学習項目が多岐に渡る場合、全ての項目について文章を書くことは非常に大変である。その代わりとして、口頭説明を自らに課すというのは、非常に優れた代替的学習方法だと思う。

今回履修したこのコースは、研究者としての今後の自分の仕事に直結するのみならず、日本企業との協働プロジェクトにおいても非常に有益であるということが目に見えて理解できるため、履修期間を通じて、常に強い学習動機が自分の中にあったように思う。それは、今日の最後のクラスを終えても、まだ自分の内側にあり続けている。実際に、このコースで取り扱っている二冊の専門書を知らず知らず、何度も読んでいる自分がある。参考までに、二冊の専門書を紹介しておく、
“Evaluation: A Systematic Approach (2004)”と“Experimental and Quasi-Experimental Designs for Generalized Causal Inference (2002)”という書籍だ。

このコースの最終試験は、今から二週間後にあるが、それまでに、単にテキストを繰り返し読むのではなく、絶えず自分に口頭説明をすることと自分の言葉で文章を書くという二つの学習方法を並行させていきたいと思う。このコースを履修することができて、本当に幸運であったと思う。2017/10/23 (月) 19:50

No.329: Developmental Irreversibility

I will experience certain oscillation this winter. It will facilitate my development.

A tree outside the window is oscillating by breeze. The oscillation reminds me of one of the principles of human development. We become a new self after we experience a proper amount and degree of oscillation. We cannot come back to our previous self once we become a new one, although we may sometimes experience temporary regression. It is called developmental irreversibility.

If we drop a glass from the table and if it breaks, we cannot undo it. I remember a proverb: “It is no use crying over spilt milk.” Our time has irreversibility, and so does our development.

It is time to bid me farewell; that is for my previous self. My new self would come after I experience developmental oscillation this winter.

The naked tree oscillating by breeze looked like calling me. 09:07, Saturday, 10/28/2017

1685. 秋も終わりに差し掛かったある夜の思念

今朝は少しばかり遅い起床となった。七時少し前に起きてみると、辺りを包む闇が、これまで以上に深くなったような気がする。今週末からサマータイムが終わるということも納得ができる。これから本格的に冬に向かっていく。

不思議と、文章を執筆する修練をもっと積みたいという思いが湧き上がる。日々、日記や論文を通して、それなりの文章を書いているが、やはり絶対量が不足している。ここで注目しているのは単に量の問題ではなく、連続的な思考と感覚の流れを掴めているかどうかの問題だ。

日々の生活の中で、随分と多くの思考と感覚が見過ごされてしまっているのではないか、という考えが脳裏をよぎる。一方、仮にそれら全てを文章として記録をしたら、どのような発見があり、そうした行為によって自分の思考と感覚は、どのようなものになってしまうのだろうか、という関心が尽きない。

思考と感覚の連続的な流れに真に寄り添い、それらに形を与える時、流れそのものの変容とそれらの形そのものの変容に対して、異常な関心がある。昨夜少しばかり考えていたのは、そうしたことを実現させる手段として、どのような形式で日記を書いていくと良いのかということだった。

日本語の日記においては、思考や感覚の流れの中でも、最も印象に残るものを掴まえる形で文章を書き留める。おそらく、その方向性は間違っていない。ただし、そのような場合、思考と感覚の流れを忠実に形にするというよりも、流れの中にある重要なものだけを抜き出し、それに形を与えるということを意味する。私が理想とするのは、そうした実践に加え、絶え間ない流れを絶え間ない形と

して外側に表現していく実践を行うことである。もしかすると、こうした実践を行う上では、日本語の日記よりも短く、連続的に文章を書くことを可能にする、英文日記の方が形式としてふさわしいのかもしれない。

とめどない内側の流れをいかに外側に形として残していくか、そこに今の私の関心があり、そこに今後の大きな課題があるのだと思う。

昨夜は就寝前に、少しばかり奇妙な思念に捕らえられた。人生を終えた時、火葬にするか土葬にするか、という問題である。私は火葬を選び、自分の遺灰の半分を太平洋に、残りの半分を宇宙空間に撒いて欲しい、と近親者をお願いすることを考えていた。半分は地球に、残りの半分は宇宙に帰る。それは礼儀であり、自分の信念の反映であるように思えた。

なぜ突然、火葬か土葬かの選択について考えていたのかわからない。ましてや、自分の遺灰をどこに撒くのかという選択についても、なぜそのようなことを考え始めたのかわからない。だが、北欧に近いこの場所の、秋も終わりに差し掛かった闇夜に包まれた夜であれば、そのようなことを考えてもおかしくはない。2017/10/24(火)07:58

No.330: Reading for Teaching

I engaged in active reading in the morning. I read all of the contents as I planned before starting to read.

I was reading texts as if I would teach a course for the topics. Having the intention to teach the contents in future can enhance my motivation and effectiveness for learning. I believe that everything I am learning here at University of Groningen will lead to my future research and teaching. Whenever I read some papers and textbooks, I will always keep in mind that the contents can be my teaching materials in my future. 13:02, Saturday, 10/28/2017

1686. 無妥協

妥協はしないようにする。そのようなことをふと思う。とりわけ、三つ目の修士課程を終えた後の博士課程の進学先については、妥協をせずに慎重かつ大胆に意思決定を行いたいと思う。今のところ、

現在進行している三つ目の修士課程を終えたら、一年間ほど客員研究員として米国の大学に所属しようと思っている。

客員研究員の応募条件として、一つは博士号の取得者という条件があり、もう一つは実務家としての豊富な経験という条件がある。この二つの条件のうち、どちらかを満たしていることが重要であり、私は後者の条件を通じて応募をしようと思う。というのも、今から六年前に会社を退職して以降、独立して、成人発達理論の研究をもとにした実務に従事してきたからである。とりわけ、ここ数年間においては、いくつかの日本企業と協働プロジェクトを行わせていただく機会に恵まれ、依然として実務家としての側面を強く自分の中で保持している。

今後、より学術研究が本格的なものになっていこうと思うが、そうであったとしても、実務の世界に絶えず関わるという姿勢を崩さないようにしたいと思う。そうした事情もあり、客員研究員の応募の際には、実務家としての側面を主張する形になるだろう。一方で、三つの修士号に関しては、時々、それらを一つにまとめれば、一つの博士号に該当するのではないかと思うことがある。三つの修士課程に在籍することを通じて、随分と専門性を深めることができたのではないかと実感することがよくある。

そうしたことを踏まえると、実務家としての側面を強調しつつも、三つの修士課程で培ってきた専門性についても応募書類の中に盛り込みたいと思う。一年間の客員研究員の期間が終わった後に、可能であれば米国のその大学の博士課程に進学したいと思う。

やはり自分の最大の関心領域である、人間発達と教育、そしてそれら二つの傘の下にぶら下がっている、発達科学、教育科学、システム科学、ネットワーク科学という四つの科学領域を包括的に探究する場として、その大学は申し分ない環境を持っている。

無事に客員研究員として受け入れられ、その後もしかすると、一旦修士課程から始めることを勧められるかもしれない。その場合、自分にとっては四つ目の修士課程となるが、迷わずその道を選び、そこから博士課程へ進学していこうと思う。学位の数は全く問題ではなく、大切なことは、人間発達と教育を上記の四つの科学領域を通じて探究し続けることなのだ。さらに、その大学には、教育哲学や作曲の探究を行う豊かな場が提供されている。

それらを総合的に考えると、今後どれだけの時間がかかろうが、その場所に自らの身を置きたいという強い思いがさらに高まる。科学、哲学、音楽に関する生涯を通じた探究の礎を築き上げる意味で、その大学での生活は極めて重要なものになるだろう。2017/10/24(火)08:18

No.331: Latent Explosion

The external world is saturated with a roaring sound of wind. Today has been very stormy since early morning. What does it tell to me? It foretells something profound to me, but I do not know what it is.

Probably, I may need to awaken my tempestuous energy to create something new that is still latent. Creation sometimes or always requires explosive energy. I realize that I have such potential energy inside myself. To put it another way, I “am” the gigantic and vast explosion per se. 06:21, Sunday, 10/29/2017

1687. 呼び声に従って

何かを始めるのに遅いなどということはない。そのようなことを自分に言い聞かせることがしばしばある。

何かを始めるのに遅いということはない。それは当たり前だ。なぜなら、そもそも時間というのは虚構の産物であり、遅いや早いなどという概念が入り込む余地がないからである。

日々の着実な進歩。実際のところは、その進歩の実感が、何かを始めることに遅いなどということはない、という考えを深めていく。

フローニンゲン大学での二年目のプログラムが始まり、あるコースを履修している最中に、先週の自分と今週の自分の確かな違いを感じたことを鮮明に覚えている。実は、それと同じ体験は昨日もあり、厳密に言えば、毎日それを感じている。そこにあるのは、絶え間ない進歩の実感なのだ。あるいは、何かを着実に深まっていく感覚、と言っていいかもしれない。

そもそもこの世界には無数の知識領域と実践領域がある。そうしたことを分かっていながらにして、その時の私は、新しい領域がまだまだ無数に存在することに驚きを隠せなかった。そして、ひとたびそうした未知の領域に足を踏み入れてみると、自分の世界がまた新しく広がり、内面世界がさらに豊かになっていく感覚を得たのである。

昨日も、些細な進歩に対して、無上の喜びを感じていた。それは、あるコースの履修前に掴みづらかった概念が、今となってはそれを掴むのみならず、自分の身体の中にその知識があるという感覚を持てていることだった。ほんの数週間前には、その概念の存在すら知らなかったものが、今となっては、その存在と共にいるのだ。そして、その存在との結合により、世界がまた新しく見えるようになり、内面世界がさらに豊かに深くなっていくことを実感している。

日々の確かな進歩がもたらす充実感は、学術探究のみならず、作曲実践についても当てはまる。数ヶ月前の私は、ドレミファソラシドが鍵盤のどこにあるのかなど全くわからず、楽譜など一切読めない状況にいた。それでも私は、「自分は作曲をする人間である」という確信を超えた確信があった。

確かに、その確信が芽生えた時の私の年齢は、シューベルトが亡くなった時の年齢であるから、作曲実践に従事し始めたのは遅いと言っていいだろう。だが、表面上遅いように思えたとしても、私の中では、全く遅いなどとは思わなかった。何かを始める際に、それが早いか遅いかなどというのは、決断の材料にならない。

何かを始めようとする意志だけが決断の材料になる。そうした確固たる意志は、早いか遅いかという二元論を真っ二つにしてくれるように思う。早いか遅いかを悩むようであれば、結局確固たる意志がないのだと思う。そして、その対象となる実践は、その人を呼んでいないのだと思う。呼び声のかかった実践であれば、早いか遅いかなどという迷いは生じようがない。なぜなら、それは二元論を超えた世界からもたらされる声だからである。

作曲について、私は日々、自分の小さな進歩を、自分の内側で生起している現象とみなすのみならず、自己を超えた世界からの恩寵だとみなすようになっている。それは、呼び声からの恩恵だと言っていいかもしれない。人は、こうした恩寵の中で確かな進歩を実感する時に、充実感というものを得るのではないか。そして、そうした充実感、日々の幸福さと密接に関わっている。

充実感も幸福感も、自らの意志に従った行為からもたらされるのと同時に、自己を超えた呼び声の恩恵からもたらされるものだと思う。何かを始めることに対して、早いか遅いかを懸念するというのは、こうした充実感や幸福感を感じることに對して、早いか遅いかがあることを案じるのと同義だと思う。

充実感や幸福感というのは、万民に対して平等に与えられたものであり、それを感じるのに、早いか遅いかなどありはしないのではないか。なぜ人は、自分を呼ぶ声を聞こうとせず、それに身を任せて生きることをしないのか。2017/10/24(火)09:16

No.332: Recent Diary

I have not written an English journal so much in the last couple of days, which is somewhat intriguing to me. I am wondering about the factor and reason, both of which should be plural and could be interdependent. I do not care how much I write a journal everyday, but the point is whether I write it everyday or not.

Both quantity and quality do not matter. Yet, a dualistic fact of whether I write it or not has critical importance.

Today's journal is an indispensable bridge between the self of today and that of tomorrow. That is why I just keep a journal everyday no matter how short and trivial my writing is. 06:28, Sunday, 10/29/2017

1688. 質的成長と量的成長について

今日も一日中、書齋の中で探究活動に精を出す日であった。先ほど、知人の方からいただいた、「質的成長」と「量的成長」の関係に関する質問について考えていた。

私たちはある瞬間に、これまでできなかったことが突然できるようになる、という経験をしたことがあると思う。つまり、私たちは成長の過程において、そうした、ある意味特別な瞬間が存在することを体験的に認識している。それを経験する当人にとっては、まさにこれまでとは全く異なる視界が開けてくるような体験であり、それは次元が上昇するような感覚として知覚される。

そうした質的な成長が起きるためには、実践の積み重ねという量的な成長が必要とされるが、そうした地道に蓄積されていく量的な成長と、特別な瞬間とも言える質的な成長の関係性がどういったものなのかが、多くの人にとっては見えにくいかもしれない。

いただいた質問もまさに、そうした特別な瞬間を生み出すために必要な量的な成長と、それまでに積み重ねてきた量的な成長との違いというのは一体何であろうか、というものであった。たとえば、容器に水を貯めていくと、ある時点を迎えると、突然に、水が容器から溢れ出す。私たちが経験している特別な瞬間というのは、まさにそうした、容器から水が溢れ出す現象のことを指していると言えるだろう。

それでは、水が突然に溢れ出す現象の前には、一体どのようなことが起こっているのか、という質問を受けた。その質問に対しては、連続的な発達プロセス (continuous developmental process) の中に存在する「非連続的な発達 (discontinuous development)」と呼ばれる現象によって説明することができるだろう。

水と容器の例を引き続き用いると、近年のダイナミックシステム理論を活用した発達研究の知見をもとにすれば、次のようなことが言える。実は、そうした水が突然に溢れ出すという特別な瞬間の前には、大変興味深い現象が観察されている。端的には、「エントロピーの増大」と呼ばれる現象である。エントロピーというのは、元来は物理学の概念であり、簡単に述べると、それは乱雑さの度合いのことを指す。

水が溢れ出すためには、単に水の量が増えることは十分条件ではなく、水 (厳密には容器) が「揺らぎ (揺れ)」を経験することが必要条件になる。水が増加するに従って、水の容器が水量に耐えられなくなる地点に近づくと、突然に容器そのものが揺れ始め、水がさらに増加するようであれば、容器は突然質的に新たなものに変容するか、容器が崩壊という現象が起きる。前者はまさに質的な発達であり、後者は退行だと捉えるとわかりやすいだろう。

例えば、キーガンの発達モデルに対してダイナミックシステムアプローチを適用した、フローニンゲン大学のサスキア・クネン教授の研究結果も同様の現象を示唆している。つまり、ある人が一つの発達段階から次の発達段階に移行する直前には、発達的な揺れ (葛藤) を経験し、それを乗り越え

ることができたら、次の段階に到達し、発達の波が安定したものになる。これはキーガンも理論的に主張していることであり、古くは、ピアジェも「均衡」と「不均衡」という概念を用いて理論的な説明をしている。そうした発達的な揺れを起こす要因やメカニズムはまだ解明されていないが、非連続的な発達現象が起きる前には、人間の器にせよ、能力にせよ、そうしたエンロピーの増大が起きるといふ仕組みが確認され始めている。

最近、人間の発達や学習を研究していてよく思うのは、私たち人間は、絶えず均衡と不均衡を経験しながら発達を遂げていくということである。器にせよ、能力にせよ、どちらも共に、均衡を好みながらも、不均衡を好むという、相反する性質を同時に内包しているようなのだ。

ある地点までは、器や能力は安定を好み、量的な増大を続けていくが、ある地点に到達すると、なぜだか不均衡を求めるような動きをし始める。それが結果として、能力の発達プロセスに揺らぎをもたらし、その揺らぎを乗り越えた後に、質的に全く異なる能力が誕生し、再び安定した状態に戻る、という不思議な現象が見られる。

今、そして今後私が取り組んでいこうとしている研究テーマの一つは、未だ解明されていない発達的な揺れを起こす要因やメカニズムの解明に、システム科学とネットワーク科学のアプローチを採用していくことにある。

いただいた質問は、発達現象の中で未だ解明されていない多くの点を内包するものであり、引き続きその問いについて研究を進めていきたいと思う。2017/10/24(火) 20:09

No.333: The Relationship between Writing Texts and Composing Music

I noticed one of the similarities between writing texts and composing music is that both include a limited number of themes in one work. For instance, I elaborate and expand a main theme in an academic paper. It is not so usual to encompass several themes in one paper. Furthermore, each paper comprises several key messages, but in general, one message is introduced in one paragraph. Several messages are seldom included in one paragraph.

All of them discussed above can be true to music composition. In principle, a piece of music has a central theme, and each measure in the work plays a crucial role in introducing the theme. In other words, each measure with a message can show us the culmination of the theme at a certain point in the work.

In my understanding, each piece of music has a central theme and some messages that can guide us to the pinnacle of the theme. 18:00, Sunday, 10/29/2017

1689. 一連の不思議な夢

起床直後、昨夜見た一連の夢について思い返していた。場面が多岐に渡る夢であり、そのどれもが何の脈絡もない関係性で確かにつながっているという不思議な夢だった。

私は、穏やかな海の見えるマンションの一室にいた。このマンションは海岸と隣接しており、すぐにも海に行くことができる。砂浜には松林があり、松のてっぺんがマンションの部屋からよく見える。一人の友人が私の部屋にいて、ベランダの窓の方を見て突然叫び始めた。

友人:「大きなヘビが部屋に入ってくる！」

友人の視線の先を見ると、この世のものとは思えないほどに大きな黒いヘビが、ゆっくりとベランダの窓からすりすり部屋の中に入ろうとしていた。ヘビの体の長さや太さを見るにつけ、とてつもなく大きなヘビであった。その黒々として体の色が、どこか不気味な光沢を発しているように思えた。ヘビの全身が部屋に入ってきた時、このヘビは、特に私たちに危害を加える様子を見せなかった。

そのヘビは、ゆっくりとベランダの窓から寝室の方へ向かって動いている。友人がヘビの後をつけながら、このヘビをどうするかについて私に話をもちかけた。

私:「寝室の窓から外に逃がすことにしよう」

そのように私は提案した。ヘビの全身が寝室に入りきったのを確認し、友人はこのヘビを窓の外から逃がすことに向けて準備を始めた。

友人がヘビを先導すると、ヘビは素直に窓の方へ向かっていった。私はその様子を部屋の外から見守っている。

ヘビの頭が窓の外に出始めた時、友人がヘビの体をゆっくりと窓の外に押し、ヘビはすすりすりと窓の外に落ちていった。だが、ヘビの最後尾に二つの尖ったトゲのようなものが付いており、ヘビが最後に勢いよく窓の外に落ちた際に、それらのトゲが友人の顔を引っかいたようだった。

ヘビに顔を引っかかれた友人は、トゲの部分に毒がないかをひどく心配していた。

私:「大丈夫、あのトゲに毒はないよ」

直感的に私はそのように述べた。推察するに、あのヘビは毒を持っていないように思えたため、そのように友人に伝えたが、少し懸念もあったので、その後の友人の様子を見ていた。しばらく経っても友人に何の変化もなかったため、私たちは一安心した。寝室の窓の外を眺めると、地上が随分と遠くに見えた。

友人を心配するのみならず、この高さから地面に落ちたヘビを案じている自分がいた。しかし、ヘビの姿はもう見えなかった。

気がつくと、私は大草原を歩いていた。私の傍に、何やら二匹のイノシシの親子がいた。どうやら、彼らと私は行動を共にし、一緒にこの大草原を歩いているようだった。二匹のイノシシの親子は、人間の言葉を理解する。特に日本語を理解することができるようだ。

この優雅な大草原をしばらく歩いていると、何頭かの小さなイノシシが草原の反対側からこちらに歩いてくるのが見えた。すると、続々に他の小動物が草原を優雅に移動している光景が目飛び込んできた。その光景を目撃した瞬間、私の体が宙に浮かび、私はこの草原を飛びながら移動することになった。イノシシの親子は、依然として地上を歩いていたが、私の体はすでに宙に浮かんでいたので、お互いに言葉を掛け合いながら草原を移動していた。

すると、前方のみならず、後方から巨大化したイノシシの群れが、こちらに向かってやってくる姿が見えた。その姿を見ると、彼らが自分たちを襲おうとしていることがわかった。それに気づいた私た

ちは、すぐさま草原を勢いよく走り始めた。私の体はどんどんと宙に浮き始め、気づけば草原から随分と離れた高さの場所を飛行していた。しかし、前方に巨大化した馬が出現した時には、馬のジャンプにぶつかってしまうのではないかという心配があった。そのため、さらに高度を上げて空を飛ぶことにした。

イノシシの親子の方を見ると、一生懸命に他のイノシシから逃げようとしている姿が目に入った。しかしよくよく見ると、イノシシの子供の姿しかそこにはなかった。

私:「空を飛んで逃げよう！」

私はイノシシの子供に向かってそのように叫んだ。すると、イノシシの子供も空を飛べるようになり、飛びながらこの大草原を進んで行くことにした。

地上で襲われる心配はもはやなくなったが、イノシシの子供が前方を指差しながら、「ワシがいる！」と小さく叫んだ。その方向を確認すると、一羽の大きなワシが空を旋回しており、こちらを襲撃する機会を伺っていた。だが、ワシがイノシシを襲うことは考えにくかったため、大丈夫だということを伝えるために後ろを振り返ると、イノシシの子供はフクロウになっていた。

そのフクロウは、何も言わず、私の横を大急ぎで通り過ぎ、遥か彼方に飛び去っていった。フクロウの後ろ姿を見つめながら、しばらく茫然としていると、ワシが今度は人間である私を襲うかのようにこちらに向かって飛んできた。

てっきりこちらを攻撃してくるのかと思いきや、そのワシが私に何か話しかけてきた。その瞬間に夢の場面が変わった。

あのワシは一体何と私に話しかけてきたのだろうか。今となってはそれを思い出すことができない。昨年の中の夢の中でも、イノシシの親子が現れた時があった。また、今年に入ってから、黒色ではないが、白い巨大なヘビが運河を泳ぐ姿を目撃した夢を見ていた。イノシシにせよ、ヘビにせよ、どちらも共に私にとって重要なシンボルとして何かを暗示しているように思える。2017/10/25(水) 06:47

No.334: Utility of Examples

I have a propensity to formalize my thoughts in an abstract way, which often discourages me to think of concrete examples. However, I have recently recognized the utility of examples for both explaining abstract notions to others and cultivating my understanding of certain abstract topics.

Ideally, examples should extract from my own experience and expertise. I should avoid just using the examples written in a text. Those examples made by others often lack the energy to convey meanings. On the other hand, examples derived from myself encapsulate the so-called existential energy to deliver meanings in a more powerful way. 18:09, Sunday, 10/29/2017

1690. 夢の続き

暗闇に包まれた早朝のフローニンゲン。書斎の窓から外を見ると、遠くの方にチラチラと黄色く輝く光を見つけた。光の存在する高さが地上ではなく、空の中空にあったことから、それが街灯の光ではないことがすぐにわかった。しかし、その高さが微妙な位置にあるため、その光を発しているものが何なのかよくわからなかった。

黄色く輝くその光は、動くことなく一点で止まっていた。高さとしてはおかしく、輝きとしてもおかしかったが、一瞬それは星なのではないか、と思った。しばらくその光を観察していると、急にその光が動き始めた。とても関心があったので、その光を眺めていると、どうやらヘリコプターか何かであることがわかった。

書斎の窓際から、再び机に戻ってきた時、再度昨日の夢について思い返していた。ヘビと遭遇した夢、そして、イノシシと遭遇した夢。その後にも、実は複数の夢を見ていたことを思い出した。一つは、芝生が不揃いのグラウンドで、何人かの友人とサッカーをしている夢だった。

グラウンドには、馬か豚の大きな糞が所々に落ちており、それらに気をつけながらボールを蹴っていた。しばらくサッカーを楽しんでいると、突然、芝生が消え、グラウンドが裸の茶色い土に変わった。さらには、先ほどまでは屋外であったはずなのに、なぜだか天井のある巨大な一室に自分がいることに気づいた。その巨大な部屋の中で、私たちはサッカーを続けていた。

すると、天井付近に、三台ほどの飛行物体を見つけた。それぞれの飛行物体には一人ずつ人間が乗っており、上空から地上に向かって何か黒い粉のようなものを撒いている。私たちは、その飛行物体の撒く物にぶつからないようにボールを蹴っていた。ボールを蹴り始めてすぐに、飛行物体の撒く物の近くにボールが転がっていった。

何を撒いているのか気になったため、それを確認してみると、どうやらチョコレートのようなものだった。三台の飛行物体は、チョコレートの粉を地上に向かって撒いていたのだ。

再びボールを蹴り始めると、今度はボールが、飛行物体の操縦士がチョコレートを撒こうとしている場所に転がっていった。すると突然、その操縦士は「No~!!」と叫んだ。操縦士の容姿を確認すると、アフリカ系の男性だった。その操縦士は、人差し指を左右に振りながら、「No~, No~」と小さく叫び続けている。そして、飛行物体の高度を徐々に下げ始め、地上に降りた。その乗り物から操縦士が降りようとした瞬間に、彼が乗り物内にあったマシンガンを手に取り、銃口をこちらに向けてきた。

その瞬間に、こちらが何を言っても発砲してくるということが直感的にわかったため、私は瞬間移動するかのように、一瞬にしてその男の方のところに行き、飛び蹴りを頭に食らわせた。するとその男はよろめきながら倒れ、私たちは無事にその場から逃げることができた。

一瞬にして夢の場面が変わり、今度は迷宮のような建物の中にいた。何人かの知人とそこから脱出することを試みている夢である。

断崖のような場所から、巨大なブロックのようなものを底の見えない地面に向かって落とし、足場を作っていくような夢だった。

昨夜はいつも以上に多くの夢を見ていたように思う。実際には、迷宮を抜け出た後にも、さらに二つほどの夢が続く。しかし、最後の二つの夢は、言語描写が難しいため、ここに書き留めておくことをしない。夢の数と自分の無意識の状態とはどのようなつながりがあるのだろうか。そのようなことに少し関心を持っている。2017/10/25(水)07:17

No.335: New Season

Summer time finally ended. Today is quite calm, compared with yesterday. It was stormy yesterday.

I feel a new season coming that will bring me something important. I will experience transformation this winter. It is a reliable prediction based on my experience last year.

What will I become after this winter? Yes, exactly, I will become “me.” 09:19, Monday, 10/30/2017

1691. 学びに伴う身体感覚

書斎の窓の向こうには分厚い雲が広がっている。しかし、東の空の方向を眺めると、雲が多くなく、夕暮れの輝きが見える。

今日も気がつかないうちに夜に近づいている。先ほどまで、「評価研究の理論と手法」のコースで取り上げられている専門書を読んでいたところ、あっという間に三時間の時間が過ぎていた。

私は昔から活字を集中して読むことが苦手なのだが、ここ最近は、自分の脳のそうした特性を理解したような読み方を自然と行うようになってきている。もしかしたら、人は長時間続けて活字を読むことができないのかもしれないが、私の場合は活字を黙読している最中に注意が特に散漫となる。

専門書や論文に記載されている一つの文章から、次から次へと連想が膨らみ、そうした連想の渦に巻き込まれていると、全くテキストの読みが進まないということがよくある。こうした思考特性があり、連想から連想を産みながら何かを考えていくことには長けているのかもしれないが、一つのことをあまり集中して考えることはできない。より正確には、自分の関心を最大限に掴む一つの項目についてなら集中して考えることができるが、専門書や論文の中には自分の関心事項を強く掴むもの以外のものの方が圧倒的に多いため、黙ってそれらを読もうとすると、一向に集中することができないのだ。

そうした自分の思考特性に気づいて以降、やはり最も有益な方法は、音読をしながら、自分に対して説明をすることである。正直なところ、黙ってテキストを読んでいても、一向に頭の中に何かが入ってくる感覚がしないのだ。それは物理的に、自分の脳に入っていない感覚がしており、より微細な感覚を観察すると、知識項目が自分の身体に浸透していない感覚がするのだ。これは不思議な感覚なのだが、自分の理解できない文章を読むときは、文章の内容と自分の意識が空中に浮かんでいる感覚がする。

一方、自分が文章を理解している時には、文章の内容そのものが身体の中にあり、自分の意識も身体に密着している感覚がするのである。まさに、日本語の「腑に落ちる」という表現は素晴らしく、自分が何かの知識項目を理解している最中には、身体を中心部が活性化されており、知識項目とその中心部が繋がっている感覚がするのである。究極的には、何かを理解するというのは、こうした身体感覚を養っていくことに他ならないのではないかと思う。その一つの方法として、自分に説明しながら音読するというのは、効果的であるように思う。

先ほども、気づかないうちに三時間続けて音読をしていたが、その時間があつという間に過ぎていった。単純に念仏を唱えることにも、脳を活性化させる作用があるということを耳にしたことがあるが、先ほど行っていたのは、意識的に念仏を唱えるような実践と言えるだろうか。あるいは、念仏を通じて自分に語りかけるようなことを三時間連続で行っていたと言えるだろう。

先ほど読んでいたのは、“Evaluation: A Systematic Approach (2004)”という専門書だが、今日読み返していた箇所は、この一ヶ月間においてかれこれ四回ほど繰り返し読んだことになる。四回目の今日において、テキストの内容が随分と分かり始めた、という段階にいる。ただし、なんとなく分かり始めたという段階と、随分と分かり始めたという段階の間には、何か質的に大きな差があるように感じている。それはまさに、身体感覚を通じた差である。

先ほどの三時間の間においては、読み返していた箇所の概念や理論が、自分の身体の奥深くに浸透していく確かな感覚があった。人が何かを学ぶというのは、こうした感覚を不可避に伴うものなのだろう。学習する喜びの一つには、こうした騙すことのできない確かな身体感覚が、学習過程の中で必ず起こり、それを経験することにあるのかもしれない。今日も夕食後に、再びテキストの続きを同じように読んでいきたいと思う。2017/10/25(水) 18:10

No.336: Writing as a Valuable Learning Method

Writing encourages us to sift out what ideas and experiences are most important for us. For instance, we have to select some significant concepts or emotions when we start to write. It can be said that these concepts or emotions invoke our urge to write.

Related with reading, writing facilitates our understanding of texts with the same logic mentioned above. Writing requires us to choose what we focus on and to elaborate our thoughts, and this process fosters our understanding of texts. Hence, I believe that writing is a tremendously valuable learning method. I cannot find any other methods to cultivate our conceptual, emotional, and existential understanding. 09:43, Monday, 10/30/2017

1692. 成人の音楽教育に関する学際的研究に向けて

遠くの空にかかる雲が、美しい赤紫色を帯びている。フローニンゲンの街はすっかり秋が深まり、もう冬の足音が聞こえるということは、これまでの日記の中に何度も綴っていた。

今この瞬間に結論を下すのは早計だが、今年の冬の厳しさをなんとか乗り越えられるような気がしている。ここで述べている厳しさとは、物理的な寒さのことを指しているわけではない。それは精神的な過酷さを意味する。

北欧に近いオランダのこの場所における冬が、あのよう自分の精神に働きかけるとは、実際にそれを昨年に体験するまで全く想像ができなかった。日本の冬とも異なり、米国での冬とも異なる、別種の過酷さが昨年の冬にはあった。昨年の冬を一言で形容するならば、「存在の凝縮」もしくは「存在の濃縮」という言葉がふさわしいだろう。あるいは、「存在」という言葉を、「精神」に置き換えることも可能だろう。

果たして、今年の冬はどのような冬になるだろうか。人はある状態の中にいるとき、その状態を適切に表現することができない。言い換えると、認識主体が対象と同一化している状態においては、その対象を真に客体化することはできないのだ。昨年の冬を上記のように形容できたのも、すでにその状態を私が通過したからだろう。

これから、今の自分には全く形容できないような冬がやってくるのだろうか。それを考えると少々恐ろしい。だが、今の自分が表現できないそのもの自体が、次の自分の姿であることを私は知っている。それこそが、人間の内的発達の原理だ。

今の自分には言葉にできないもの。それが次の成熟段階の自己に他ならない。ということは、言葉にならない過酷さを今年の冬がもたらすのであれば、その冬は、次に待つ自分の姿に他ならない。自分は冬であり、冬は自分であったのだ。そのようなことを、夕暮れの雲を眺めながら思う。

昨日に引き続き、来年の研究テーマについて思いを巡らせていた。突如として、いっその事、自分の研究テーマを大きく変えようか、ということの数日前に閃いた。もちろん、人間発達と学習ということは根幹にあり続けており、特に成人の発達と学習に着目した研究をするというのは同じである。また、活用する科学領域についても、教育科学、発達科学、システム科学、ネットワーク科学の四つであることにも変わりがない。

ただし、研究のトピックを変えていこうかと思ったのである。これまで六年間ほど、企業人を絶えず意識した研究や実践を行っていた。現在も、いくつかの日本企業との協働研究と実務に関与しているため、そうした研究と実務は今後も引き続き行っていくと思う。だが、学術機関において研究するテーマは、もっと自分自身に密着したものでいいのではないかと思い始めている。その小さな現れは、昨年のように、成人のオンライン学習について研究するというものだった。

数年前から私自身がオンライン学習を成人に提供しているという経験をもとに、昨年の研究を進めていた。今年の研究においては、特にMOOCに焦点を当てていこうと思っている。MOOCに関しても、これまで再三述べているため、簡潔に述べると、MOOCの統計学のコースのおかげもあって、今私はフローニンゲン大学で研究を続けることができている。フローニンゲン大学が要求する統計学の事前知識が非常に厳しいものであることは、以前に述べた通りである。

また、それと同じぐらいに、自分の人生に大きな影響を与えたのは、シンガポール国立大学が提供する作曲に関するMOOCであった。このコースのおかげで、私は作曲実践にを始め、作曲を通じて、日々の生活がより充実したものになった。こうした個人的な強い体験が根幹にあり、今年

MOOCに関する研究を行っていく予定である。さらには、来年に所属予定の米国の大学においても、MOOCの研究を主に行っていくを計画していた。

しかし、ここ数日、また別のトピックについて研究を行いたいという思いがふつふつと湧き上がってきている。それは端的には、成人の音楽教育である。特に、成人になってからピアノを習おうとする人、あるいは長いブランクを経た成人が、いかにピアノ演奏の技術を高めていくのかに強い関心がある。同時に、成人が作曲技術をいかに高めていくのか、というトピックも合わせて関心がある。

特に、後者の作曲については、自分が今まきに行っていることであるため、研究を進めていく動機は極めて強い。自分の内側にあるさらに深い研究動機には、人は何歳になってもピアノ演奏や作曲を学ぶことができる、という思いであり、ピアノ演奏や作曲を通じて、音楽に秘められた美と力を多くの人にも体感してほしいという思いがある。つまりは、成人になってから音楽を学ぶことは全く遅いことではなく、音楽を通じて日々がより充実したものになり、日々が幸福を感じられるものに変容するのだということ、多くの人にも経験してほしいという思いがある。

ピアノ演奏と作曲技術に関する研究のイメージは既にあり、現在はさらに、「美的経験の質的差異」についても研究をしたいと思っている。ピアノ演奏と作曲技術に関しては、上記で述べた四つの科学領域の理論やアプローチを存分に活用することができる。しかし、これまでの日記に何度も書き留めているように、科学の世界だけに留まることをしたくない。成人が音楽を通じて出会う美的経験の質的差異を研究するのであれば、哲学の領域の「美学」の考え方を適用することができるだろう。

そして言うまでもなく、音楽を対象として研究をするのであるから、科学と哲学の領域を超えて、音楽の領域に関する探究に従事することができる。もしかすると、私がこれまで抱えていたものを解消してくれるカギはまさに、成人の音楽教育の研究を通じた学際的な研究にあるような気がしてならない。自分はこの研究をしたかったのかもしれない。私はこの研究をするために、今までの経験を積んできたのかもしれない。

フローニンゲンの街に訪れつつある闇の世界が、妙に明るく輝いて見える。2017/10/25(水) 18:42

No.337: Music Composition with the Scientific Mind

Modeling is a beneficial apparatus to enhance my music composition skills in that it enables me to test my hypothetical ideas. I often come up with hypothetical notions about music composition. Once I formulate those ideas into a testable model, I apply it to my practice for music composition.

After testing, I usually refine the model or create a new model based on continuously emerging my hypothetical ideas. The process of generating hypothetical notions, formulating a model, and testing it is a virtuous cycle of learning for me. I will continue music composition with the scientific mind. 09:51, Monday, 10/30/2017

1693. 企業社会と自分

夢的一幕が終わった時、自然と目が覚めた。起床直後に広がる闇の世界は、どことなく、昨日よりも深いような気がする。昨日見ていたよりも、どこか街灯の光が弱いように思えるのは気のせいだろうか。

昨日の夢がとても印象に残っている。どうやら私は日本にいるようだった。季節は今と同じぐらいの秋が深まっていく時期であった。その日から私は、あるコンサルティング会社に勤務することになっていた。学術研究に専念することから一旦離れ、もう一度企業社会の中に入り、実務に特化するような思いがあったのかもしれない。

早朝の六時半ぐらいに自宅を出発し、会社のビルがある都心まで歩いて向かった。気候は歩くのにふさわしく、寒くも暑くもなかった。

ちょうど七時ぐらいに会社に到着し、ビルの中に入って、その会社のあるフロアにまっすぐに向かった。オフィスに入る前に、シャワーを浴びようと思ったので、オフィスのあるフロアに設置されているシャワー室に向かった。すると偶然、シャワー室の中で知人と出会った。その方とは一度だけ会って話したことのある程度だが、その方が自分が今日から働く会社で働いていることを思い出した。

私:「あっ、Aさん、お久しぶりです。もう入社されていたんですか、早いですね～」

A:「ああ、加藤さん、お久しぶりです。いや〜、いつもこの時間に出社し、帰りは夜の十時ぐらいなんですよ」

Aさんは少しばかり苦笑いを浮かべながらそのように話した。Aさんの回答から察するに、本当は早く自宅に帰り、もう少しゆったりとした生活をしたいのだが、それをさせない無言の圧力をAさんは感じているような印象を受けた。

簡単に挨拶をしたところで、シャワーを浴びようとする、思っていた以上に人が多いことに驚いた。なんとか空いているシャワールームを見つけ、そこでシャワーを浴びた。

シャワーを浴びた後、どの服を着て今日から出社しようかと少し考えていた。私はいくつかの服を持参していたようであり、最初の出社日にどの服がいいかをそこで決めようとしていたのである。今日から働くその会社は、名の知れたコンサルティング会社だったが、私が手に取った服は、いつもと変わらない私服だった。しかもその私服は、襟のないTシャツだった。

着替えを済ませる直前に、ロッカーの隣の人は何やら不満を漏らしていた。

見知らぬ人:「何で服と一緒に靴をロッカーの中にしまわないといけないんだ。これじゃあ、服が汚れてしまうじゃないか」

私もシャワールームに入る前に、ロッカーに荷物を置いた時、同じようなことを思った。しかし、その人の不満は私のものよりも随分と強いようだった。

着替えを済ませてオフィスに入ると、始業時間に近い時間帯となっていた。今日からこの会社で働き始める者は20名ぐらいおり、社長から激励の言葉をもらうような式が企画されていた。その式が行われる会議室に入ると、今日から働き始める全ての人たちがすでにその場にいた。その場にいたのは全員男性であり、年齢はバラバラであったが、皆一様に企業社会の中で経験を積んできた者たちだということがわかった。同時に、その場にいた人たちが企業社会の中でしか生きていないことも察した。

私を除く全員の身なりは整っており、名の通ったコンサルティング会社で働く者らしいスーツを着用していた。おそらくそれらのスーツはそれなりの物なのだと思うが、全て凡庸な物に思えた。社長の到着が予定時間よりも遅れているようであり、会場ではしばらくの時間があつた。

今朝自宅を出発した時には、私は再度企業社会の中で働くという確かな意思があつた。しかし、今この瞬間の会議室の中に流れる何とも言えない重々しい雰囲気に対して、気が滅入りそうな思いになつた。端的に述べれば、企業社会という、ある種特殊な世界の中だけでしか生きてこなつた者が発する異臭のようなものを嗅ぎ取っていたのである。

会議室の窓から外を眺めると、早朝の秋晴れとは打って変わり、空が灰色であり、どこか寒々とした雰囲気を醸し出していた。

最初の出社日の早々に、少々気が重い感じを抱えていると、社長が会議室に到着した。その場にいた全員が立ち上がり、無言で社長を迎えた。その社長は、活力に溢れる中年男性であり、恰幅も良かった。社長が一人一人に握手をしながら壇上に近づいていった。

歓迎式の進行が遅れていることもあり、社長は途中から一人一人に握手することをやめ、急ぎ足で壇上に向かった。壇上に到着して歓迎の言葉を述べると、その社長は引き続き、この会社の今後のプランについて話を始めた。そのプランの要旨は、今後日本オフィスを拡大させていくとのことであり、私たちが提供しているサービスを独立させる形で新しいグループを作り上げていく、とのことであつた。

このコンサルティング会社がグローバルファームであることはとても有名であり、新たな試みに着手することにも長けていることは知っていたため、社長が掲げるプランは十分に実現可能だろうと思つた。その場にいた他の者たちは、おそらく、社長のこのプランを称賛し、そのプランの実現に向けて自分たちがいるのだ、と考えている気配を発していた。しかし、私はどこか物寂しく、白々とした思いになつていた。

社長が言葉を発すれば発するほどに、私の気分は暗澹たるものになつていった。そこで私は、この会社に入社することを辞退しようと思ひ立った。正直なところ、この会議室に足を踏み入れた瞬間から、いや下手をすると、シャワールームで知人の方と言葉を交わした時に、この会社で働くことはで

きないと思っていた。社長がプレゼンを全て終えたところで、何か質問はないかと会場の全員に投げかけた。そこで私は真っ先に挙手をした。一人だけ私服を着た私はそれだけで異質な存在とみなされているようだったが、社長のプレゼンを褒めるのでもなく、質問を投げかけるのでもなく、一言お礼を述べた後に、入社を取り消してもらうことを願い出た。

社長は一瞬当惑した表情を浮かべたが、私の意志を察したようであり、その申し出をすんなりと受け入れた。会社との契約がどのようになっているのか定かではなかったが、入社を取り消し、とにかく早くこの会社から外に出たいという思いで一杯であった。

入社を辞退した後に、私はオフィスのあるビルから外に出た。空気がとても澄んでいて、先ほどの空がまた変化し、清々しい秋晴れの空がそこに広がっていた。

オフィスから自宅に歩いて戻る最中に、私は頭の中で、昨日まで読んでいた論文の続きを読んでいた。2017/10/26(木)07:05

No.338: Spacing Study Time

Cramming learning contents causes a detrimental effect for our learning. Instead of cramming, we have to space learning time and allocate the contents across days.

I have two exams coming this week and next week. I have strategically spaced my study time and distributed learning contents in my study plan. I have repeatedly engaged in active reading by explaining the contents to myself and writing their summaries. The positive effect is being manifested in front of my eyes. 11:08, Monday, 10/30/2017

1694. 亀とキツネ

昨夜見ている夢には少しばかり続きがあったことを思い出した。あるコンサルティング会社で働く初日に辞表を提出し、会社からの帰り道、突然自分の手元には一本の手綱があった。手綱の先には、小さな亀が繋がっていた。どうやら自分は、会社のあるオフィス街の中を、手綱に繋がれた亀と共に歩いているようだった。その亀は私が歩くのと同じペースで、いやむしろ私の歩く速度よりも少し早いぐらいの速度で歩いていた。実際に、私は前を行く亀についていく形で歩みを進めていた。

しばらく亀と散歩を続けていると、亀が学校の校門の方に入っていくとした。私は少しばかり手綱を引き、亀が学校内に侵入しないようにした。すると、校門に何歩か足を踏み入れた亀が突然叫び始めた。手綱に繋がれた亀の後を追ってその様子を確認すると、亀は一匹のキツネと遭遇したようだった。

そのキツネが亀を威嚇するような素振りを見せており、それに対して亀が叫んでいたのだ。キツネが前のめりになって亀を突こうとすると、亀は小刻みなジャンプをし始めた。それを見て私は、亀をキツネから離そうとし、手綱を強く引っ張った。すると、キツネは校舎のある方へ引き返していき、亀の興奮も収まったようだった。

亀と私は、また東京の街中を歩き始めた。しばらく歩き、ふと亀の方に目をやると、その亀は一匹の白い犬に変化していた。中型犬とまでは言えないが、その亀は、小型犬よりも少しばかり大きい犬に姿を変えていたのである。本来、その瞬間に何かしらの驚きの感情を抱くものだと思うが、不思議と一切の驚きはなく、亀が犬に変容したことを当然のように受け止めている自分がいた。

私は、その犬と一緒に江東区にある木場公園に向かった。姿の见えない誰かが、私は木場公園で多くの時間を過ごしてきたことを告げ、その公園に向かおうという自然な意思が自分の内側から芽生えた。

公園に到着する前の横断歩道で、二人の男女が私が連れている犬を褒める声が聞こえてきた。私は完全に二人の話す言葉を理解していたが、どこか自分が日本語が話せない人間を装うかのようになり、二人の男女の方を振り返ることもせず、公園に向かって歩みを続けた。横断歩道を渡り切った瞬間に、夢から覚めた。

昨夜の最初に見た夢といい、亀と共に散歩する夢といい、それらは強い印象を私の内側に残している。とりわけ最初の夢は、私が企業社会の中で再度組織に属することはもはやできないということを示すものだった。それを再確認させることを示唆する夢だった。入社したその日に会社を去る届出を提出し、その帰り道の自分の頭の中は、人間発達と学習に関する研究のことで一杯だった。

他者の時間の中ではなく、自分の時間の中で、自分の望むことだけに従事していこうという、明確な意思の再燃を改めて確認させてくれる夢だった。その次に見た夢もまた印象深い。

あの亀は一体何を象徴しているのだろうか。人間よりも早く歩くことのできる亀。私をリードしていく亀。そしてその亀が、一匹の白い犬に変化したことは何を象徴しているのだろうか。また、あのキツネはどういった意味を持つシンボルなのだろうか。

あの亀は、もしかすると私の自己そのものに他ならず、自己が今の姿とは全く異なるものにまた変容していくことを示唆しているのかもしれない。そして、あのキツネはもしかすると、この社会そのものなのかもしれない。

「キツネにつままれる」という日本語が脳裏に浮かぶ。この社会は、巧妙に私たちを騙すような思想や仕組みで満たされており、あのキツネはそれを象徴している存在だったかのように思えてくる。自分の内側には、そうしたキツネと立ち向かい、勇猛に闘いを挑もうとするあの亀のような特質が宿っているのかもしれない。様々なことを考えさせてくれる一連の夢だった。2017/10/26(木)09:23

No.339: The Importance of Paraphrasing

If we want to reap the outcomes of learning, we have to stay active while learning. Whenever I read academic papers and books, I try to paraphrase what I read. Paraphrasing is one of the active learning methods.

As many studies show, passive reading is not so effective for cultivating our knowledge. Perhaps, the most active learning method is writing when we learn by ourselves. If I cannot write about all the contents I learn, I try not to forget to paraphrase whatever I read. 10:54, Tuesday, 10/31/2017

1695. 召喚と派遣

今日も気付けば夕方の時間を迎えていた。どこか毎日同じことを書き留めているような気がする。しかし、そうした一見同様の感覚に思えることでも、その中には確かな差異がある。それを学んできたのが、昨年一年間の欧州での生活だった。日々の生活の中で自分が考えている主題そのものは、もしかすると多分に同一のものかもしれない。だが、毎日必ず新たな気づきや発見が得られるということに対して、私は毎日驚きと感謝の念を持っている。毎日の行為や実践の外見は全く同じであり

ながらも、内実は全く異質なのだ。そうした内実の差異が、実際には外見上の微細な差異となって滲み出す。そのため、心眼を凝らして観察してみれば、日々の行為や実践の外見上においてすら、確かな差異を見つけることができる。

昨日と今日の間にはどのような差異があっただろうか。明確な差異をすぐに列挙することは難しい。なぜなら、本質的に私たちは、歴史性と連続性を併せ持つ存在だからだ。

昨日という歴史が今日とつながり、両者の間には諸々の連続性がある。そうした特徴を踏まえてみると、自己の内側に日々何かしらの差異を見出していくことは困難なのかもしれない。だが、もう一つ忘れてはならない特徴は、私たちは本質的に差異を生み出す存在だ、ということである。歴史を踏まえ、連続性のさなかにあつて、私たちは絶えず差異を生み出しながら人生の歩みを進めていく。

もしかすると、歴史や連続性が差異を生み出すというよりも、差異が先行する形で歴史と連続性を生み出しているのかもしれない、というようなことを思うことがある。

今日は午前中に日本企業との協働プロジェクトの仕事が入っていたため、午後から昨日に引き続き、「評価研究の理論と手法」のコースのテキストを音読していた。自分に説明するかのように、絶えず音読をしていると、時を忘れる速さで二時間半の時間が過ぎた。

テキストから視線を外し、ふと書斎の外を眺めた時に、辺りが薄暗くなっていた。日々の私が行っていることは、本当に書くことと読むことだけに集約される。誰も見ていないところで絶えず書き、絶えず読むという行為を継続させている。その姿は自分だけがどこかで見守っている。そうした行為の合間合間に、読むこと書くことを通じて得られた少しばかりの知見を用いながら、様々な関係者の方たちと協働作業に従事しているというのが、現在の自分の生活の姿だろう。

先ほど、一呼吸を入れるために立ち上がった時、「自分は何かに遣わされた存在なのかもしれない」という思念と遭遇した。自分が日々をこのような形で生きていることの背後には、何かからの「召喚」、もしくは、「派遣」と呼べるような現象が潜んでいるのではないかと思う。

おそらく自分がこの世界に誕生し、この世界で生きていくことの意味と意義は、そうした召喚や派遣の責務を全うすることにあるような気がしてならない。自分の人生を、自己を超えた次元で形成される意味の中で生きれるようになったことは、自分の中での大きな変化の一つであるように思える。

毎日、絶えず読み、絶えず書くという行為を行っているのは、遣わされた任務を全うするためなのだ。なぜ自分が日々、探究行為に打ち込んでいるのかという理由は、もはや個人的なものではなくなり始めている。何かに絶えず見守られ、同時にその何かに仕えているというこの確かな感覚。それが自分の背中を絶えず支え、自分の背中を絶えず後押ししている。2017/10/26(木) 18:13

No.340: Paraphrasing as Metacognitive Activities

I mentioned the effectiveness of paraphrasing on knowledge acquisition. Metacognitive activities may exist in the underlying mechanism.

When I paraphrase what I read, I have to take a metacognitive perspective on it in an epistemological sense. It may drive my learning process. Writing also involves metacognitive activities, and thus it is beneficial to knowledge acquisition because it is active learning and it stimulates our brains.

I am gradually grasping why paraphrasing and writing are effective for our learning. 11:34,
Tuesday, 10/31/2017

1696. バッハの「平均律クラヴィーア曲集」に範を求めて

昨夜、音楽に関する今後の研究についてアイデアを書き留めていたように思う。その研究テーマについては、いつか必ず研究に着手したいと思っているが、それは今すぐに行くというよりも、もう少しだけテーマを温めておこうという考えに至った。そのように判断した背後には、少しばかり戦略的なものが混じっている。

今年と来年に関しては、やはり当初の予定通り、オンライン教育、とりわけMOOCに焦点を当てた研究を行っていく。この研究を通じて、システム科学とネットワーク科学の手法にまずは習熟していくということが、戦略的な要素の一つ目である。今の私は、仮に大学で講義を受け持つとしたら、発達

科学、とりわけ発達心理学に関する講座を開講することにはそれほど関心がなく、理想としては、発達研究や教育研究の文脈でシステム科学とネットワーク科学の理論と手法を取り上げるような講義を開講したい。

システム科学とネットワーク科学に関する知識というのは、まだまだ初学者の次元にあると思っているが、もうすでに、欧米の大学でそうした講義を担当している自分の姿が鮮明に浮かび上がる時がある。実際に、日常の探究活動の中で、システム科学とネットワーク科学のテキストを音読している最中に、しばしば自分が欧米の大学で講義を行っているかのような想像世界の中で、一人ぶつぶつと音読や自分への説明を行っている。

自分でも時に何をしているのか不思議に思うことがあるが、ある大学で講義を受け持っている自分がすでに今の自分の内側にいるのだ。これまで欧米大陸の学術機関に所属し、その中で様々な研究者とやり取りをしてきたが、まだ誰も、教育科学、発達科学、システム科学、ネットワーク科学の四つの領域を真の意味で横断的に研究している者はいないように思える。この四つの領域を学際的に探究し、それらを架橋させるような試みに強く情念を動かされている自分の姿を見るにつけ、研究者としての自分の使命の一つは、おそらくそれなのだと思う。

「教育」「発達」「システム」「ネットワーク」という四つの言葉は、自分にとって「魂」という言葉に匹敵するような重みを持つ。今日も夜に、少しだけシステム科学とネットワーク科学のテキストに目を通そうと思う。

昨夜就寝前に作曲実践を行い、その手を止めて就寝の準備を始めようとした時、バッハの楽譜が気になったので、それに少しばかり目を通していた。目次に目を通した時に、「平均律クラヴィーア曲集」が目飛び込んできた。これは、24個の全ての調を一つ一つ用いた、前奏曲とフーガで構成されている。その事実を知った時、合計で48個のバッハの楽曲の一つ一つを順番に辿る形で作曲を行っていけば、全ての調の特徴を掴みながら作曲技術を高めることができるのではないかと考えた。

調べてみると、バッハの平均律クラヴィーア曲集は、現代においても、ピアノ演奏の技術を高める際に重宝されているとのことである。バッハのこの曲集は「旧約聖書」に喩えられ、ベートーヴェンのピ

アソナタ全集は「新約聖書」に喩えられているというのも、どこかうなずけるものがある。一つの前奏曲に範を求めたら、一つのフーガに移り、また別の前奏曲に移っていく、というサイクルで作曲実践を行っていかうという新しい方向性を見出した。

48個の曲に範を求めた後、自分の作曲技術はどのような状態になっているのだろうか、そして、音楽の中に新しい何を見出すことができているのか、という期待感のようなものが芽生える。とりあえずは、数日前から着手し始めた、エドヴァルド・グリーグのある曲を参考にした後は、バッハの平均律クラヴィーア曲集をゆっくりと辿っていくことにしたい。2017/10/26(木) 18:40

No.341: Journals and Journal-Like Music Equivalent to My Life

During lunch, I was thinking about whether my journals and journal-like music works could represent my entire life. My life does not create journals and music works, but instead, it equals them. In other words, my life is my journals and music works; and vice versa. Thus, creating my journals and music works is nothing but leading my authentic life. This was a simple finding.

13:15, Tuesday, 10/31/2017

1697. 孤独の園の淵にある孤独

今朝は六時ちょうどに目が覚め、目覚めの瞬間に心身の優れた状態を確認した。この心身の優れた状態、とりわけ、身体の快調さは、昨夜の夢と何らかの関係があるかもしれない。

昨夜の夢の印象が残っているうちにそれを書き留めておきたい。昨夜は夢の中で、ある友人と共に長い道のりを走っていた。

夢の中での運動が、覚醒世界における自分の身体の調子を整えることにつながっていたように思える。だが、もう少しその夢の背景について書き留めておいた方がいいだろう。

夢の世界に足を踏み入れると、連続殺人の事件が現在も続いている不気味な街にいた。その街の不気味さは、単に連続殺人が水面下で起こっているということだけではない。そのさらに水面下で、私たちには気づくことのできない重大な何かが進行しているようだった。それを象徴するように、この街の人々の表情は妙に明るい。

街のショッピングセンターに行くと、この街で連続殺人が行なわれているということにあたかも無頓着であるかのような人たちが、いつもと変わらぬ生活を送っている。人々の幸せそうな生活ぶりを表面的に見ると、この街は本当に平和だ。しかし、事実として、今もなお連続殺人が行なわれていることは確かなのだ。それにもかかわらず、人々がそうした事件を気にかけていないことを不可思議に思っていた。

祭りの背後にある悲劇、もしくは、平和の陰にある地獄を私は見て取っていた。

私は一人の友人と、このショッピングセンターに足を運んでいた。私たちは買い物をするというよりも、人々の様子を確認するためにここに来たようだった。友人と私との間で一つの共通理解があった。それは、犯人が次のターゲットにしているのはその友人だということである。どうやら過去の被害者の経歴を調べると、特殊な能力を持つ人たちが殺人のターゲットになっているようだった。

友人も私も特殊な能力を持っているのだが、次のターゲットは私ではなく、確実に友人であることをお互いに認識していた。ある意味、このショッピングセンターに足を運んだのは、人々の偵察のみならず、犯人をここにおびき寄せて、そこで捕まえるということにあった。算段として、二人の能力を結集すれば、なんとか犯人を撃退することができるだろうと思っていた。

ショッピングセンターを歩いていると、人々の平和そうな表情とは裏腹に、私たちの内側には何とも言えない違和感があった。その違和感は、犯人がこの場所にいるということを静かに伝えていた。同時に、犯人の持つ力が、私たち二人の力を結集しても、到底抑えられないほどに巨大なものであることも感じていた。

欧州の主要都市の駅のような作りを持つ、この開放的なショッピングセンターの中で、私たち二人は圧迫されるようなものを感じ取っていた。

友人と私が二階のフロアの端まで歩いて行き、トイレの前を通り過ぎようとした時、犯人がトイレの中にいることを察知した。二人とも犯人の居場所に気づいており、おそらく犯人も私たちの気配を感じていたであろう。友人と私は、焦ることなく、ゆっくりと一階につながっている大きな階段を降りていった。この横幅の大きい階段を降りている最中、何人もの一般市民とすれ違った。相変わらず、人々の表情は明るい。

一方、私たち二人の表情は真剣なものだった。なぜなら、犯人の力が自分たちの力を遥かに凌駕したものであることに少しばかり愕然としていたからである。友人はトイレの方を見ることもせず、前だけを見て階段をゆっくりと降りていた。

私はやはり犯人の存在が気になったため、階段からトイレの方向を見上げた。すると、犯人がそこにいたのである。犯人の姿をそこで初めて確認した。特殊な能力を持つ人間を次々と殺害していく犯人の容姿は、私を驚かせた。

犯人の容姿は極めて端正であり、年齢もまだ若い。さらに驚いたのは、彼が全裸のまま、トイレの外の壁にもたれかかり、激しく泣いていたことだ。ダビデ像のような肉体を持つ犯人は、トイレの外の壁にもたれかかったまま、自分の右手で両目を覆うようにして激しく泣いている。

なぜ彼が泣いているのか最初は全くわからなかった。すると、目の前にいた友人の目にも涙が滲んでおり、私の内側にも何か込み上げるものがあった。その瞬間に私は、今この場にいる三人に共通した何か共鳴し合っていることを見て取った。それは孤独の園の淵にある孤独だった。この一点だけが、三人に共通しており、私たち三人はそれを共通に抱えながら日々を生きていることを知った。

犯人はその場を一步も動くことができないほどに、涙を流し続けている。だが、一切の音を漏らすことなく、大粒の涙だけが彼の目から静かに落ちていた。

孤独の園の淵にある孤独。その孤独さゆえに、犯人は実際に、特殊な能力を持つ他者を殺していく。友人と私は同様の孤独さを日々抱えながら生きている。

犯人と異なる点があるとすれば、それは、友人と私は、日々確かに死んでいく自己と再生を遂げる自己の双方を見守る試みに従事しているということであった。すなわち、他者を殺すのでも、自己を殺すのでもなく、死と再生を絶え間なく遂げていく自己に寄り添いながら日々を生きているということだった。

私たち三人には、特殊な能力と孤独性という共通点がありながらも、自己の死と再生のプロセスの捉え方だけが決定的に違っていた。その違いは生き方に現れ、実際の行動の中に現れていた。こ

の違いがまた、私をひどくやるせない思いにさせた。ショッピングセンターから外に出た時、外界はほのかな黄色い雰囲気にもまれていた。2017/10/27(金)07:16

No.342: Soothing Effect of Writing

I had a trivial concern that I do not have to articulate here, but it somehow has a negative impact on my cognition. I have to describe the present state of my mind to calm it down. Writing is very beneficial to soothe my mind.

As I mentioned before, one of the primary aspects of writing is metacognition. Observing the pacified state of my mind after writing, metacognition has a soothing effect on my mind. The more I delve into the nature of writing, the more I discover a mystery of writing. 16:29, Tuesday, 10/31/2017

1698. 整備された庭園と不可能なバランス

夢の中の殺人犯の姿がまだ心の眼に焼き付いている。あの夢には、実はまだ続きがある。

犯人の姿を目撃し、その場から立ち去るようにショッピングセンターを後にした友人と私は、犯人から逃げるように、突然走り出した。夢の中の街は非常に栄えていたが、街の中心部から外に出ると、そこは自然に溢れていた。

背の高くない木々が無数に植えられている砂利道を、友人と私は走っていた。友人の走る速度は極めて速く、私は徐々に彼についていくことが難しくなっていた。そのため、私は空を飛んで移動することにした。友人の頭上を飛ぶ形で、私たちはあてもなく砂利道を進み続けた。

すると、目的地などなかったはずの私たちの目の前に、フェンスで仕切られた庭園が現れた。その庭園には、色とりどりの花が植えられている。私はその庭園の様子を上から眺めていた。すると、庭園の真ん中を貫く一本の道に、友人がショッピングセンターからここまでたどり着くのににかかった時間が表示されていた。

私は空を飛んで、一足早くこの庭園の上空にたどり着いたが、友人はまだ地上を走り続けており、あと少しでこの庭園にたどり着くところだった。庭園を貫く道に大きく表示された時間が、秒単位で刻まれていく。「1:10:27」という表示を最後に見届けると、ちょうど友人が庭園にたどり着いた。私は依然として、庭園の空の上にいる。

どうやら、庭園の先に出口のようなものがあり、そこにたどり着くことがその瞬間の私たちの目的であった。友人が地上から声をかけてきたこともあり、私は上空から庭園内に足を踏み入れた。

庭園内の色とりどりの花々はよく手入れがされており、花々の大きさと高さが整えられていた。それらの花々はどれも地面に植えられており、それらの高さは、人間のかかとの高さほどでしかなかった。

この庭園に関して一つ奇妙なことがあった。それは、この広大な庭園の中に、友人と私以外に誰もいなかったことだ。友人よりも半歩ほど前の距離で歩き続けていた私は、庭園の出口の前に、小さな小川が流れていることに気づいた。その小川はとても小さく、小川というよりも、小さな水路だと言ったほうがいいのかもしい。

人がまたげばすぐに飛び越えてしまえるぐらいの水路が、色とりどりの花々が植えられている地面を取り囲んでいた。私はその水路を飛び越えようとする、水路の中に埋め込まれていた杭のようなものを踏んでしまった。しかし、私はそれについて特に気にかけることなく、友人よりも先に庭園の出口から外に出た。外に出て、フェンス越しに後ろを振り返ると、友人はまだその庭園内に残っていたが、突如として、庭園の出口が小さくなり始めた。同時に、庭園内のフェンスが壁に変わり、その壁から大量の水が庭園内に流れ込み始めた。どうやら、先ほど私が踏みつけた杭は、そのスイッチの役割を果たしているようだった。

その間にも出口がどんどん小さくなり、友人はその庭園から抜け出せるかどうか危うい状況になった。友人が出口のある扉に駆け込んできた時に、夢の場面が変わった。

次の場面では、日本語が比較的流暢な米国人と何やら会話をしていた。その米国人男性と私は知り合いではなく、私たちは初めてそこで会話を交わすような間柄であった。彼は口数の多い男であ

り、最近出くわした悔しい出来事について突然話し始めた。聞くところによると、彼はここ最近になって武道を始めたようであり、昇級に苦戦しているとのことだった。

話によると、数日前にようやく五級の試験を突破したようだ。彼の話に耳を傾けていると、徐々に彼の話に興味を持ち、五級の試験内容について尋ねてみた。すると彼は突然、自分の片腕だけを用いて自分の全体重を支えるポーズを示してくれた。腕立て伏せをする時には、基本的に両腕と両足の四点が地面に接しているが、そのうちの三点を宙に浮かせ、一点だけで全身を支えるというポーズだ。

彼が示してくれたポーズを見たとき、それぐらいであれば、自分もすぐにできると思い、彼の横でそのポーズを取ろうとしてみた。すると全くうまくいかなかった。私の頭の中には、ヨガの中で似たようなポーズがあり、そのポーズを行ったときの記憶があった。しかしよくよく思い出してみると、ヨガのそのポーズは、全身を一点ではなく、二点で支える。ヨガのそのポーズでは、片腕と片足の二点を地面に着け、もう片方の腕と足を宙に浮かせる。私は彼が示したポーズに何度も挑戦してみたが、一向にうまくいかない。

私は絶えず、自分の重心がどこにあるのかを考え、その重心が、地面を支える一本の腕を通じて地軸と合致した時にそのポーズがうまくいくのではないかと思った。しかし、何度挑戦しても無理であったため、さらによくよく考えてみると、片腕で逆立ちをすることは可能であったとしても、胴体を地面に平行にさせる形で、片腕だけを用いて全身を支えることは、原理上不可能なのではないかと思った。だが、実際にその米国人は、そうした不可能なことを成し遂げていた。このポーズを今この瞬間に行うことが無理だと分かったため、私は彼とまた会話を続けた。

会話が終わり、一緒にその場から立ち去ろうとすると、その場所は、オリンピックに使われるような立派な体育館であることに気づき、立ち去ろうとするその米国人に対して、体育館にいた観客のような人たちが彼に大きな拍手を送り始めた。

私たちは、彼らの存在に一切気づけなかったが、彼らは私たちが難解なポーズに取り組む姿を体育館の上から見ていたようなのだ。バランスを取ることが不可能だと思われるポーズを見事にやっけてきたその米国人男性。そして、そのポーズに果敢に挑む私がそこにいた。2017/10/27(金)08:07

No.343: Argumentation Diagrams

To enhance my argumentation and memory retention, I thought that drawing argument diagrams would be beneficial. Some research reveals that it can augment our argumentation skills and solidify factual and conceptual knowledge.

The more I learn in diverse fields of academia, the more knowledge I have to digest. The current situation requires me to grasp a voluminous amount of knowledge. To meet the requirement, argumentation diagrams are a candidate for an effective learning tool. I try to experiment drawing argumentation diagrams by applying a classical tool of mind mapping. 16:46, Tuesday, 10/31/2017

1699. 意味に宿る治癒と変容

今日は六時の起床から始まり、六時半を迎える前から今日の仕事を開始させた。記憶に残っている夢を書き留めることを続けていることもあってか、夢を再想起する力が高まっていることを実感する。その証拠に、随分と夢の詳細を書き留めておけるようになってきている。夢から覚め、夢を再想起することを日々実践していたことによって、自然とそうしたことが可能になったのだろう。

夢について思い出せる分量が増え、それを書き出す分量が増えれば増えるほど、夢から考えさせられることが増えているように思う。それはまさに、夢から多くのことを学んでいることに他ならない。まさか夢を通じて、このような形で探究を深めることになろうとは、夢日記を書き始めた頃の自分には想像もつかなかったことである。

夢の中で現れるシンボル一つ一つに固有の意味があり、一見脈絡のないストーリーの中にも、隠れた物語構造がある。そうしたものを、可能な限り一つ一つ探っていくようなことを夢日記を通じて行っているようだ。

私はこれまで何度か、夢には精神を治癒し、変容する作用があると書き留めていた。より厳密には、そうした治癒や変容が起こるのは、夢と真摯に向き合った場合のみに限られる。夢を見ることは、ほぼ毎日、多くの人が行なっていることである。しかし、多くの人が自分の夢に癒されることは稀であり、

自分の夢によって変容への一歩を歩みだしていくことも稀なのではないだろうか。夢というのも他の実践領域と同様に、単純にそれを体験しているだけでは、何の意味も効果も私たちにもたらさない。

夢が持つ本質的な意味と作用は、夢を再想起し、夢から意味を汲み取ろうとする実践の中に宿るものと言えそうだ。特に、夢の中に現れるシンボルと物語構造の中に精神の治癒と変容をもたらす作用が内包されているように思える。そうしたことから、一つ一つのシンボルを再想起し、物語構造に考えを巡らせ、それらから何かしらの意味を汲み取る行為が大切となる。このようなことを考えてみると、もしかすると、シンボルや物語構造が私たちの精神に癒しと変容をもたらすというよりも、私たちが紡ぎ出す意味そのものに癒しと変容の作用が内包されているのではないか、という考えに至る。

私たちが自分で紡ぎ出す意味の中に癒しと変容の作用が含まれているというのは、とても驚くべきことだと思う。ヴィクトール・フランクルのロゴセラピーの根幹原理は、まさにこの点にあるのではないかとふと思った。

自分で見出した意味が私たちを癒し、その意味が私たちを変容させるというのは、とても不思議なことである。しかし、ダイナミックシステム理論の考え方をういれば、これは非常に納得することができる。

絶えず意味を生み出すことを宿命づけられた私たちにとって、意味創出が停滞してしまう時、精神が不健全な状態に向かっていく。本来、精神という動的なシステムには、絶え間ない自己創出が不可欠であり、それが停滞してしまうと、システムは崩壊の方向に向かってしまうのだ。私たちが絶えず意味を紡ぎ出していくというのは、まさにシステムの生存に関わることであり、紡ぎ出された意味は新たな意味を創出することにつながっていくのみならず、システム全体の修復を行う働きを担っている。意味を汲み取る行為が精神に癒しと変容をもたらすメカニズムの一つには、そうしたことが関係しているように思えて仕方ない。2017/10/27(金)08:42

No.344: Mind Mapping for Argumentation Diagrams

The tentative experiment to use mind mapping for argumentation diagrams is quite successful.

My mind remains very active in the process of mapping facts and arguments of the text that I am working on. I can realize that I am building systematic knowledge by this practice.

Since one of the important outcomes of reading comprehension is a mental representation of a text in a form of semantic networks, this method is suitable for reaping the outcome in that it can establish knowledge networks.

Mapping facts and arguments in a network way is compatible with the nature of our brains; our brains intrinsically generate neuronal networks.

I try not to just copy sentences in the text. Instead, I attempt to paraphrase them in my own words and connect the text information with my previous knowledge and experience, which keeps me actively engaged in the text. 18:38, Tuesday, 10/31/2017

1700. 芋の秘密

ポツリポツリと、小さな雨粒が書斎の窓を叩く。今日は晴れの予報が出ているのだが、早朝のこの時間帯は小雨が降っている。少しばかりどんよりとした雲が空を覆っている。

昨日の夢は三部形式になっていた。夢の最後の形式の中で、私は田舎にあるこじんまりとしたレストランの中にいた。そのレストランは、一軒家を改築する形で店を営んでいる。レストランは自然に囲まれており、非常に落ち着いた雰囲気を持っている。

そのレストランに昼食を食べに行こうと思い、私は店に足を運んだ。レストランに入ると、この店を切り盛りしている店主の男性とそこで働く若い女性が出迎えてくれた。

テーブルに腰掛け、私は早速、季節もののランチメニューを注文した。どうやら、店主とそこで働く女性と私は顔見知りのようであり、レストランに入った瞬間から、和やかな会話が始まった。その店で働く若い女性は、一見するとアルバイトの学生のように思えるのだが、このレストランで扱っているメニューや食材の特徴について豊富な知識を持っている。彼女の知識に対して、私は敬意を表していた。

店主がその女性に声をかけ、彼女は私のテーブルに前菜を持ってきてくれた。その前菜には芋がふんだんに使われており、この芋の特徴について、彼女は詳しく説明してくれた。なにやら、このレストランの付近で取れる芋らしく、その形にせよ、味にせよ、非常に特徴的なものらしい。

ちょうど先日、店主とその女性は、この芋を取りに、近くの農家に足を運んだそうだ。そこでの芋掘りの体験についての話に耳を傾けていると、幼少時代に芋掘りを体験した時の自分の記憶が蘇ってきた。彼女の話で一つ面白かったのは、この芋は、縦に半分に切れれば、生命を維持することができ、また別の芋を生み出し続けるとのことだった。この話はとても興味深く、いろいろと質問をした。

芋の芽のある部分を横に切ってしまうと、この芋は死んでしまうそうだ。そのため、縦に切るようにして、その半分を料理に用い、残りの半分は、また新たな芋の誕生のために大事に保管しておくのだそうだ。ということは、今、私の目の前にある料理に使われている芋は、まだ生きているのだ。生きた生命をいただくことに対する敬虔な思いがやってきた。

彼女の説明に付け加える形で、店主が、その芋の交配の秘密についても説明してくれた。その話も非常に興味深く、終始、話と料理を堪能する形でレストランでのひと時を過ごした。

この夢も、その前に立ち現れた二つの夢と何か関係があるように思える。一つ一つの夢の形式が異なり、それぞれの主題が異なっていたとしても、それらの主題を貫く共通の主題があるように思える。そのようなことに考えを巡らせていると、雨がすっかりやんだ。書斎の目の前に植えられた裸の木々が、太陽の光によって黄緑色に輝いている。それは不思議な色を持つ輝きだ。

裸になった木々の横には、それらとは対照的に、紅葉で盛り付けられた一本の木がたたずんでいる。その紅葉もまた、朝日によって照らされ、なんとも言えない美しい輝きを放っている。

今日は午前中に、「評価研究の理論と手法」のコースのテキストの再読を行い、昼食前にランニングに出かけたいと思う。昼食直後に、「学習理論と教授法」のコースの最終論文の体裁を整えることを行う。午後からは、このコースで取り上げられた論文の要点をまとめる形で再読をし、来週の水曜日に迫った最終試験に向けて準備を行っていく。2017/10/27(金)09:04

【追記】

繰り返しになるが、ここで記述されている一連の夢は今から一年以上も前のものなのだが、それらに関する文章を読むと、ありありと夢の場面が再想起される。これは大変不思議であり、とても驚くべきことである。夢を見て、それが文章として書き留められる時、それは完全に長期記憶になるのかもしれない。いや、直感的にはそれは長期記憶というよりも、自らの真相に深く根付いていくような大切な経験になっていくと述べてもいいかもしれない。夢は記述されることによって、私たちにとって意味のある深い経験になっていくのだろう。

ここで書かれている一連の夢については、今後も折を見て振り返り、そこからまた新しい意味を汲み取っていこうと思う。夢が私たちに変容をもたらしてくれるという意味が徐々に分かり始めている。

No.345: Today's Exam

I will take an exam in the afternoon today. The exam is a summative test, but I regard it as a formative one. It is true that the exam tests my learning outcome in the end of the course and that is why I can call it a summative test. Yet, I think that the test is not only for measuring my learning outcome in the end of the course but also for providing me with the opportunity to think about what I need to do next. Therefore, the exam is both a summative and formative test for me.

I had positive excitement before going to bed last night. Probably, I knew that the exam was not the end but just a new start for my learning. 10:19, Wednesday, 11/1/2017